

いま、ぼくらのまちにはスポーツの力が必要だ

# マチレク会議'14

「スポーツ・レクリエーションで地域を元気に」をテーマにしたシンポジウムを東京・新宿区で開催。3名のパネラーによる事例紹介や、コメンテーターとコーディネーターを交えたパネルディスカッションを行い、スポーツ・レクリエーションの力による地域の活性化について、参加者ととも考える機会を設けた。



“まち × スポーツ・レクリエーション” を考えるためのシンポジウム。

まず、日本各地で実際にスポーツ・レクリエーションでまちを活性化する活動を行っている3名に登壇してもらい、その事例をプレゼンテーションしてもらった。

その後、3名のパネラーにコメンテーターとコーディネーターが加わり、白熱のパネルディスカッションを実施した。



- **日時** 2014年11月18日(火) 19:00~21:00
- **場所** 角筈区民ホール(東京都新宿区)
- **参加費** 参加費無料、事前申込制
- **参加人数** 142名

## 「スポーツ・レクリエーションで地域を元気に」

- **コメンテーター**：山崎 亮 (studio-L 代表)
- **コーディネーター**：宮嶋泰子 (テレビ朝日アナウンサー)
- **パネラー**：
  - 阿部将顕 (NPO法人 Street Culture Rights)
  - 深谷 香 (NPO法人 宇都宮スポーツの街づくり応援団)
  - 谷口 薫 (全日本かくれんぼ協会)



### パネラーによる事例紹介

## ● NPO法人 Street Culture Rights 阿部将顕 ストリートカルチャーを通じて、 コミュニティとまちづくりを支える

僕がやっているRAW SKOOL (ロースクール) プロジェクトという活動は、「EXPERIENCE & COMMUNITY」を合い言葉に、普通の学校では学べないことを、ストリートカルチャーを通じて青少年に提供するというものです。ストリートカルチャーには、ダンスやスケートボード、アートや音楽などが含



2008年に早稲田大学大学院を卒業後、博報堂入社。2011年に退社してカナダに移住。ダンスの大会で活躍後、帰国。フリーで働くとともにブレイクダンス仲間とNPO法人 Street Culture Rightsを設立し、ストリートカルチャーを通じた日本初の青少年交流プロジェクトRAW SKOOLを開催。

まれます。もう十数年ダンスの世界に身を置いてきたのですが、そこで学んだことがたくさんあり、それを次世代に少しでも伝えて彼らの手助けになればという思いで始めました。

活動拠点の1つは東京の杉並区の子童館で、毎月2回、無料でダンス教室を開いています。ダンス教室に参加している子供

たちは、経済的な理由でダンス教室(有料)に通えない子、在日外国人の子、不登校になった子など様々ですが、そういった子供たちの居場所や交流の場所づくりという観点で、2013年度は年間26回、約350名が参加しました。国境を越えた居場所づくりを目指し、様々な学習支援NPOや社会福祉協議会と連携して活動しています。

もう1つの活動拠点が千葉県八街市という郊外都市です。市内には児童館がないため、地元の不動産会社と一緒に、地元の商店街の空き不動産を活用して、民間運営のユースセンターを作りました。放課後の子供たちの居場所になるとともに、過疎化してしまった商店街が元気を取り戻すきっかけづくりを目指したもので、現在ははまだ実験的なプロジェクトです。

## ● NPO法人 宇都宮スポーツの街づくり応援団 副代表 深谷 香

### スポーツの持つ大きな力を使って まちを元気に！

私たちは主にスポーツボランティアを育成、派遣する活動をしています。現在、会員数は41名、法人会員5団体、ボランティアバンクの登録は129名です。

私はトライアスロンをやっていますが、最初に選手1,500人の大会を開催する場合、ボランティアの数も1,500人必要だと聞いた時はびっくりしました。そこで宇都宮のスポーツを応援するために、興味のあるスポーツ種目に無料で登録していただき、楽しみながらお手伝いをしていただけるよう、その種目に合わせてボランティア情報を配信するボランティアバンクというシステムを始めました。

具体的な活動としては、まず「宇都宮クリテリウム」や、「宇都宮サイクルピクニック、那須ロングライド」といったサイクリングイベント、最大10名でたすきをつないで走る「42.195km リレーマラソン宇都宮大会」や「宇都宮トレイルラン」などの



2002年よりトライアスロン競技を始め、2008年に栃木県トライアスロン協会理事に就任。翌年、宇都宮スポーツの街づくり応援団(USMO、通称アスモ)を設立し、2012年にNPO法人に。現在は各種スポーツイベントへの協力だけでなく、ランナー同士の交流を目的としたスマイルランナーといった自主イベントの開催も行っている。

ランニングイベント、それから地元のトライアスロン大会の実行委員をするとともに、ボランティアも派遣しています。

次に自主イベント。ランナーの皆さんに1キロ走るたびに100円を寄付してもらい集めたお金を赤十字社に寄付する「東日本大震災復興支援チャリティラン」、宇都宮環状線1周約36キロをみんなでおしゃべりしながら走る「ミヤラン」、宇都宮サイクリングターミナルという施設の依頼により、のんびり走った後に軽食と抽選会を楽しめる「スマイルラン」、12月にサンタに仮装して走る「サンタde宮環」などがあります。

それからネットワークづくり。栃木県にある4つのプロスポーツの団体や、私たちのスポンサーでもある中央卸売市場とのコラボ企画。市場が忙しくなるのは夜中から朝までなので、その空いている時間にこのスペースを使って何かスポーツイベントができないか、現在検討中です。

## ● 全日本かくれんぼ協会 副会長 谷口 薫

### 温泉街で大人も子供も楽しめる 年1回のかくれんぼ大会

全日本かくれんぼ協会は、かくれんぼ大会を年1回、湯村温泉で行っている団体です。湯村温泉は兵庫県の日本海側。県庁所在地まで車で3時間半かかる田舎町です。当初開催していたマラソン大会の参加者が少なくなっていき、インターネットで検索してみるとかくれんぼを大会にしているところは見当たらなかったため、「全日本」という名称をつけて開催しました。

2014年を例にとると、隠れる人(隠れ人) 250人、探す人(オニ) 350人を募集したところ、募集人数を超える700名が集まりました。隠れ人は隠れきると失格、競技終了までにかき見つかるとがテーマです。一方、オニも何人も見つけるのではなく、原則1人しか見つけられません。オニも隠れ人も共に仮装するのがテーマになっているので、非常に動きにくいし隠れにくいんです。

大会は10時半から80分。隠れる場所は温泉街800メートル四方のエリア。オニはゼッケンを付け、隠れ人はポケットなど



温泉手話サークル代表、イベント企画ユニットPSJ代表。以前開催していたマラソン大会のマンネリ化と参加者減少により、2000年から兵庫県湯村温泉で全日本かくれんぼ大会を毎年開催。温泉町を挙げての開催が話題となり、2014年で15回目を数え、観光誘致の一翼を担うイベントに成長。

に証明書を隠し持っています。オニが「見つけた」と声を掛けると「見つけた」と言うこと。そのまま2人で奉行所へ移動してくじを引き、大吉が出たら一緒にまちのチェックポイントを通ってゴールし、末吉が出たらペナルティとして一緒に特産品を食べます。閉会式でくじを引いて賞品が決定し、仮装の審査結果が発表されます。

現在リピーターが60%、初参加40%で新しい方々が参加してくださる大会になっています。また、当日は4割の方が地元へ宿泊してくださり、お弁当も地元で準備します。テレビや雑誌の取材も多く、温泉やグルメといった地元のチャンネルに「かくれんぼ」というチャンネルが加わったことになりました。

いずれはこのルールをごっそりと別の場所に持って行って開催したいという思いもあり、「かくれんぼ」という言葉が「柔道(JUDO)」と同じように世界で共有できる言葉になると面白いのではと思っています。

# 「スポーツ・レクリエーションで地域を元気に」

## “自己表現”としてのスポーツ

**宮嶋** 今の日本のスポーツの現状を考えると、本日の3名の方たちがやってらっしゃることがいかに斬新かわかると思えます。阿部さんはせっかく入社した大きな会社を辞めてNPOを立ち上げられたのは何故なんですか。

**阿部** 実は会社を辞める時にNPOを立ち上げようと決めていたのではなく、とりあえずダンスをしたいからと言って辞めさせてもらいました。日本のダンスの世界にはコミュニティ、つながりという言葉はあまりありません。その後カナダで出会っ



た友人がダンスを通じてコミュニティ活動をしているのを見て衝撃を受け、自分も次の世代のために何かをしたいなと思ったのが1つの理由。もう1つは、僕は岩手県の盛岡市で生まれ育ったんですが、中学時代、スケートボードやギターに情熱を傾ける子はいたのですが、やり続ける子はいなかった。親や学校からはギターなんか、スケートボードなんかと言われて受験勉強や就職活動を頑張るように言われ、続けるための場所もコミュニティもなくどんどん止めていった。勉強を続けながらやりたいこともできる環境が何とか作れないかなあと考えていたんです。

**宮嶋** 外国からダンサーを招いた講習会も行っているんですか。

**阿部** そうですね。せっかく地球に住んでいるのだから、他のまちを1つでも多く知って人生を送って欲しい。英語を話すきっかけも与えられたらと。外国に限

らず刺激を与えるということが目的です。  
**宮嶋** 子供たちにダンスを教える時はどうやるのですか。

**阿部** ダンスというと皆さん鏡を見てみんなで踊るという印象が強いです。ストリートダンスは輪になって一人一人踊ります。一人のダンスをみんなが見て一緒に踊るという感じ。初めて踊る子もたくさん来ます。最初は戸惑いますが、だんだん慣れていくと自信を持って踊るようになってポジティブになっていきます。また、ストリートダンスを通じてコミュニティができるので、それを生かして、まちづくりにつなげることもできていると思っています。

## スポーツボランティアとしての地域活性化

**宮嶋** では、2つ目のテーマ「スポーツボランティアとしての地域活性化」ということで、1つ目のテーマを広げて、相手をサポートする側に回るとことを話したいと思います。深谷さんは選手とボランティアを分ける必要はないとおっしゃっていましたが。

**深谷** 選手経験のある方がボランティアをするというのが、大会を運営する上では一番スムーズなんです。最近ではマラソン大会など、定員オーバーで抽選というところも多いですね。どうせなら選手をボランティア込みで募集し、パーティーを開いて抽選会をして、当たった人は選手に、外れた人はボランティアに回ってもらう。その代わりに、次の年はボランティアをした方々を優先的に選手にするという方法も面白いかなと。

**宮嶋** 選手がボランティアをすると、どんなメリットがありますか。

**深谷** 私もやってみるまでは全くボランティアに目を向けていなかったのですが、一度自分がトライアスロンの抽選に外れてしまい、じゃあボランティアで出てみようかなと思ってやってみると、ボランティ



● コメンテーター：  
**山崎 亮**  
(studio-L 代表)



● コーディネーター：  
**宮嶋泰子**  
(テレビ朝日アナウンサー)

アって最初から最後の選手まで全て目にする事ができるんです。しかもボランティアは選手にパワーを与えますが、選手からもパワーを与えられる。一緒に大会を作っていることに初めて気づきました。

**宮嶋** どうしてトライアスロンやスポーツボランティアをやろうと思ったのですか？

**深谷** 私は40歳を過ぎるまで運動が大嫌いでした。東京から宇都宮という全く知らない土地に移った時に、友達はいなかったけど自然はある。それで散歩を始めるとすれ違う人が走っていた。じゃあちょっと走ってみようかなと思って走ってみたらできちゃったんですよ。それがうれしかったのが私の原点です。でも年齢的に毎年自己ベストはもう出ない、となると仲間を作って一緒にスポーツを楽しむ、若しくは自分が楽しいと思える大会を運営することによって、スポーツを楽しみたいと思うようになりました。たまたま機会があって、大会の実行委員として運営に携わることができ、ボランティアを経験して私の新しいスポーツの楽しみ方が広がったという感じです。

**宮嶋** そこから一歩進んでまちづくりということも視野に入ると、先ほど市場についてお話しされていました。

**深谷** まだ実現はしていませんが、宇都宮に中央卸売市場がありまして、すごく広い場所なのに昼間は誰も使っていない。市場の組合が私たちのスポンサーになってくださったこともあって、面白い企画があったら是非やって欲しいと言われていきます。例えば土日や平日の昼間に



そこをランニングしたり、市場の食材を使ったお料理教室を開いて、最後にみんなで食べることもできる。スポーツって、先ほど阿部さんがおっしゃったようにポジティブな力があると思うので、その力でまちを元気にすることができると思います。

## まちづくりとしての スポーツ・レクリエーション

**宮嶋** 最後のテーマ「まちづくりとしてのスポーツ・レクリエーション」。谷口さんは最初マラソン大会をやっていらしたのに、なぜかくれんぼにしようと思われたのですか。

**谷口** 結局、本場のマラソン大会に負けたということなんでしょう(笑)。温泉街を走っても2キロくらいですから10キロとなると5周。単調で魅力がないと思われたのも一因だと思います。1,000人の参加者が500人まで減った時に、同じ走ってもらうならコースを決めずにまちの中を自由に走ってもらってもいいんじゃないかという、非常に軽いノリから始まっています。

**宮嶋** 軽いノリかもしれませんが(笑)、

それがまちに浸透するまでは大変だったんじゃないですか。

**谷口** そうですね。やっていることは一緒でも、まちの人からすればマラソンはオッケーでもかくれんぼとなると「???」。5回目くらいまでは大会2か月くらい前からメンバー15人くらいでローラー作戦。今日はこの道とこの道の間を40軒くらい回ろうと、19時くらいから2時間かけて「こんばんは。かくれんぼ協会です」と訪れ、「うちは仏教だから帰ってくれ」、「教会じゃなく協会です」という苦勞をしながら、だんだん理解してもらえるようになりました。

**宮嶋** 人集めに関してはどうされたんですか。

**谷口** テレビ局、ラジオ、雑誌を含めた出版社にパンフレットを送ったり、全国各地の道の駅にパンフレットを送りました。テレビって“第1回”が好きなので、テレビの朝の情報番組に取り上げてもらう徐々に認知してもらいました。そこから先は口コミだったと思います。第1回は広範囲にパンフレットを送ったこともあって、500人集まりました。大会自体のテイストがファンキーですから、変



な格好をしている人と何時間か過ごすともう一回それを感じたくなるんですかね(笑)。「かくれんぼ癖になっちゃった」と言って何時間もかけて来てくださる方が、今ではリピーターです。

**宮嶋** 最近ではかくれんぼだけでなく鬼ごっこなどのイベントをやってまちが活性化している例が増えているんですね。

**谷口** そうですね。新潟のほうでも日本スポーツかくれんぼ協会というのができたと聞いています。うちのかくれんぼは年齢に関係なく遊んでいただくためにスポーツ性をなるべく排除するところから、鬼ごっこではなくかくれんぼにしました。地域に合わせて大人から子供まで一緒に楽しめることなら、何でもいいのではないかと思います。

### まとめ1

## まちを変える スポーツ・レクリエーション

**山崎 亮** (studio-L 代表)

2008年から人口が減少し、大きな変化の時代を生きているような気がします。社会の構造自体が古くなってきていますから、その構造に合わせて偏差値で合否を決めていた大学からは新しい文化は生まれにくいかもしれません。今は過渡期で、これからの30年、学歴は全く意味がなくなって、この人はいったい何をやってきた人なんだろうという人の方が新しいことを生み出していけるのかもしれません。

表現の在り方を変えていかないとコミュニケーションは変わらないし、コミュニケーションが変わらないとみんなの意識が変わらない。意識が変わら

ないと構造が変わらない。そうすると皆さんの生活様式が変わらない。生活様式が詰まったのがまちです。みんなの生活様式を変えることがまちの変化につながりますから、これまでと同じような価値判断では、まちは変わっていかないのかもしれませんが。まちには競い合う競技ではなく、純粋に楽しむためのスポーツ・レクリエーションのほうなじみやすい。楽しむためのスポーツ・レクリエーションが浸透してきた時に、まちは変わっていくのではないかという気がしました。



### まとめ2

## つながりが生み出すパワー

**宮嶋 泰子** (テレビ朝日アナウンサー)



皆さんのお話を聞きながら、レクリエーションというのは、再び作り直すもの、再生であるということ思い出しました。

現代の競争社会のギスギスした人間関係の中で、人は孤独になっていると思います。今日お話を伺った3人の方に共通しているのは、孤独に陥りがちな人たちが、同じ身体表現でつながって、そこから大きなパワーが少しずつ生まれ、更にコミュニティとなって新しい力を生み出していくところ。会場の皆さんにここから何かを持ち帰ってもらえればうれしいです。